

ほくろ 変化あれば受診を

皮膚がん 高齢化背景に増加

ほくろのがん、知っていますか。高齢化を背景に、皮膚がんの患者数や死亡数が年々増加している。県立がんセンター新潟病院（新潟市中央区）副院長で、皮膚科の竹之内辰也医師（58）は「日本では病気の認知度が低く、進行してから受診する患者が後を絶たない」と警鐘を鳴らす。5月は皮膚がん啓発月間。ほくろの大きさが変化するなど、気になる症状があれば、悪性を疑い早期に受診するよう呼びかけている。

今月は啓発月間

皮膚がんは、がん全体に占める割合が2〜3％程度の「希少がん」とされる。ただ、全国的に患者の増加に伴い、死者も増えているという。竹之内医師は「紫外線を長期間浴びることが主な原因とされている。高齢化が進んだ影響が大きい」と説明。がん登録データによると、県内の皮膚がん患者数は2018年

に4777人で、10年前から倍増している。皮膚がんは、最も多い「基底細胞がん」、傷跡に発生しやすい「有棘細胞がん」など10種類ほどに分類される。中でも代表的なのが、皮膚の色素を作る細胞ががん化する「メラノーマ（悪性黒色腫）」だ。

メラノーマは黒い染みで始まり、徐々に盛り上がったたり崩れたり、見た目に変化するのが特徴だ。日本では10万人に1〜2人程度と発症はまれだが、進行期では半数以上が亡くなるとされる。新薬の開発で延命でき



竹之内辰也医師



メラノーマが疑われるできもの

- 形がいびつ
- 色がまだら
- 大きさが6mmを超える
- 染み出しや出血がある
- 以前と比べ変化している

⑤足の裏にできたメラノーマ⑥胸にできたメラノーマ（いずれも県立がんセンター新潟病院提供）

メラノーマ（悪性黒色腫）が代表的

るケースが増えたものの、まだ十分ではない。

最近では、お笑いコンビ南海キャンディーズの「すちゃん」のボクシングトレーナーだった梅津正彦さんが、13年にメラノーマで死去した。44歳の若さだった。

竹之内医師の下にも、テレビ番組やニュースを機に受診する人は多い。良性のほくろやいぼで済む人がほとんどだが、中には、数年前からふくらはぎの染みに気付いていた20代女性、勧められて受診したところ、メラノーマだった例もあった。

皮膚がんは高齢者や屋外で仕事をしている人に目立つが、「肌が白く、日に当たると赤くなるだけで黒くならない人は紫外線のダメージを受けやすいので要注意」と竹之内医師。①形がいびつ②色がまだら③といったできものがあつたら、受診を勧めている（表参照）。

一方で、ここ2年は新型コロナウイルスの流行で患者の受診控えも目立つ。同病院の皮膚がん新患数は、20年に前年比で2割減。21年も例年より1割少なく、竹之内医師は危機感を強めている。「自分よりも若い人が皮膚がんで亡くなると、『もっと早く受診していれば命を救えた』と特に心が痛む。取り越し苦労で済めば幸いなので、ためらわずに受診してほしい」と話している。